

日本人の



vol.31

京都、こころここに

「床の間」と目線

武者小路千家家元 千 宗守さん



せん そうしゅ 1945年京都市生まれ。武者小路千家第14家元。公益財団法人官休庵理事長。94年、ローマ法皇ヨハネ・パウロ二世に謁見し、茶の湯を紹介。大手前大、東京藝術大などで客員教授を務める。

私達の日常の生活空間から我が国の伝統様式が忘れられてしまつて久しい。それらの中でも最も具体的なものは「床の間」である。戦後しばらくの間は多くの家は和風様式であり、当然日本間によって構成され、特に客間と言われる部屋には必ず「床の間」が備わっていたものである。



床の間は日常生活で最も「晴れ」の空間

私の知人に90歳にあと僅かの老人がいるが、この人が若い頃父君の使いで、あ

る方の家を訪ねた折、早速客間に通された。もちろん立派な床の間があるのが目に入ったのであるが、その瞬間果たして自分はその床にどの様に對して座つて主人の出でこられるのを待てばよいのかという疑問が起

洋風化で無駄な空間として排除された

教訓も昔は日常よく用いられていた様に、床は日常生活の空間で最も「晴れ」の空間とされてきた。それはその成り立ちが元来そこに仏像を掛けたり、また仏像を置いて日々礼拝する神聖な空間であった。

立ったままでは「慈眼視衆生」もならない

それが茶室に用いられる様になつて、それらに代つて主客共々文句無しに頭を下げる事の出来るもの、即ち共に敬意を捧ぐ先達や師匠の墨跡等を掛ける事になった。従つて、茶室に入るとまず進むべき場所は床の前であり、正座して身を低くし頭を下げよと教える所以もここにある。また、亭主の方も掛け物は各の目線から見て「少しく高く感じる位置に飾れ」との教えも同じ理由による。

共に頭を下げる処が日常空間より消えてしまふ事は自然と目線が高くなり、例えば寺院等で仏像を拝する時、よく立ったままで見賞する姿を見かける。仏像の目線は礼拝する人があくまでも正座して見上げた時、その人と眼が合う様に造られている。立ったままでは仏様の「慈眼視衆生」もならない。私共の茶室に来てよく立ったままで見賞する姿を見かける。仏像を見る人が時々いるが、日本の庭園はどれもその隣接する部屋で正座して見る時一番美しく感じる様に構成されている。立った目線ではせつかくのそれも見逃してしまふ事になる。

この様な戸惑いは、一昔前の日本人にとっては「大人」になるための避けて通れぬ関門であった。今は死語となつて「床を背に出来る人になれ」と言う

洋風化によって高くなつた我々の目線をもつて一度日本人本来の低い目線に戻す事は、伝統的な分野だけではなく、これからの我が国の進むべき方向にも何かヒントが隠されている様に思える。



茶室に入るに手す床の前に進み正座して身を低くし頭を下げるよう教える京都市上京区官休庵

戦後、日本人は物の豊かさや引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

頭を下げ低い目線で見ると床の間高い目線では見逃すものがある

日本の暦

立春

大陸からの寒気が上空に居座り、今冬の日本列島は、ことのほか冷え込みが続きます。では暦のうえで最も寒い日はいつか。大寒の前には違いないのですが、立春も負けていません。「寒が極まって、もうこれ以上は寒くならない日」が立春なのです。

ことしは2月4日が立春。二十四節気の起點であり、冬から春へ季節が転換する日として、昔から1年の始まりとも考えられてきました。

立春に對する七十二候の初候は「東風解凍」(はるかぜこおりをとく。2月4-8日)。春を呼ぶ風が吹き、梅が花を咲かせるころとされますが、ことしの梅のつぼみはまだまだ固そうです。

リレーメッセージ



白川院 一月刊京都 編集長 山岡祐子さん

■ヨコ、タテ、ウチ、ソト

現在、仲間内以外の他者を意識したり、意見を受け入れたりできず、ヨコの人間関係だけを求める若者が増えているという。タテやソトの関係を避ければ、常に同意するミウチ、仲間だけ、永遠にそこに安住できる。しかし、「文化の継承」という観点で見れば、次代に残せるものを失つてしまふ。他者との関係性をつかめなければ、正確な理解もできない。

京都の街に暮らす人々は長きにわたり伝統芸能、技、知恵を継承してきた。個人と個人が真摯に對峙し信頼を築くとき、文化は引き継がれる。先代から当代に、師から弟子へと、とりわけ地域の祭りでは世代も価値観の連つた三世代コミュニケーションが形成されることが多い。例えば祇園祭の囃子方。子どもは「折れ反れ」―礼儀作法を自然と身につけ、祭りを続ける自覚をもつ。長い時間をかけて、相手のことをよく聞き、理解し、興味をもつ「コミュニケーション力」も得ることになるのだ。

いま、京都の若き文化継承者に注目している。彼らはタテの関係だけでなく、ヨコのつながりも強い。コミュニケーション力をいかして、さらに豊かな文化の土壌を創造し、新たな文化を生み出してほしい。

(次回の月12日のリレーメッセージは、千家十職塗師・中村宗哲さんです)

(日本人の忘れものは、京都新聞ホームページ <http://kyonon.jp/kp/kyo-no-mp/info/nwc/>で読むことができます)



手のひらに、明日をのせて。 docomo

あしたへ。

人は、前に向かって歩いて行く。
きょう無理だったことも、
あしたには実現できるかもしれない。
そんなあなたのそばにいて、
少しでもチカラになれば、うれしい。
つながりたいときに、
つながりたい何かへ。

walk with you

